

# 太宰府

1995  
6.1

■毎月2回/1・15日発行 ■編集/福岡県太宰府市総務部企画課 TEL(092)921-2121 内線513・514

## 太宰府の文化財

(121)

### 高尾山城跡

戦国時代  
字石穴所在



▶太宰府旧跡全図北図(木村明敏氏蔵)から「高尾城」の文字が見られる。

市の東南部、筑紫女学園大学やゴルフ場そして最近では環境美化センターができた山を高尾(尾)山と言います。その山頂部には昔、城が築かれていました。城といっても天守閣を持つような城ではなく、いわゆる山城というもので、しかも短期間しか使われなかつたようです。

この山城については江戸時代の地誌や地図に記録が残っています。それらによると、天正14年(1586)薩摩の島津氏が太宰府の岩屋城に高橋紹運を攻めた時、島津側の秋月氏が陣を構えた所ということです。また、山上には段々に平地があり、武者走りや空堀があると書かれています。現在でも人為的に造られたと見られる段状の平坦面や、堀切り、それらを取り巻く带状の平坦地が確認されるそうです。本格的な測量調査は実施されていませんので、これ以上のことは分かりませんが、遺跡としての残り具合はいいようですので、戦国時代の山城跡として調査、保存を期待したいところです。

ところで、岩屋城攻めは島津軍が勝利しますが、まもなく豊臣秀吉の援軍が九州に上陸したということで、島津氏は本国鹿児島に撤退していきます。翌15年5月には秀吉に降伏します。この高尾山城も役目を終えたと思われる

す。それにしても、一度しか使わなかつたかもしれないのに、山を削り、整地して城を造る戦国の武将たちの執念には驚くばかりです。

## 太宰府

1995  
7.1

■毎月2回/1・15日発行 ■編集/福岡県太宰府市総務部企画課 TEL(092)921-2121 内線513・514



(写真提供・九州歴史資料館)

## 太宰府の文化財 ①22

水城西門跡 奈良時代 大字吉松所在

四王寺山の裾野から西側の吉松まで延々と続く大堤水城には、東端——現在の旧国道3号線水城交差点辺り——と西側——太宰府市大字吉松——に門があったと考えられています。その西側の門をこの度、九州歴史資料館が発掘調査しました。今回はその調査で明らかになったことを報告します。

西門が建っていたと考えられる場所は、現在もJR水城駅から住宅地を抜けて、吉松へ続く狭い道が通っています。ちょうど水城を切ったような形です。近くには門の礎石だったと思われる石もあります。

発掘してみると、門の柱が立っていたと思われる穴が3個出土しました。現在の道路で地面が削られているので、他の柱穴はもう見つかりませんが、西門はおそらく四脚門——基礎を支える4本の柱と扉が付く2本の柱から成る——だったのではないかと推定されました。また水城の土手の頂上部で平安時代の瓦が見つかったので、2階建ての楼門形式も考えられるということです。

ほかに土塁の博多湾側の基礎部分に、長さ18mにわたって切り石を並べています。そしてそれに直交して、排水施設と考えられる石組暗渠も2カ所見つけられました。

また、水城は博多湾側に濠があったとされますが、ここでも濠と思われる落ち込みが出土しました。ただ、門の前はなく、幅約11mの道が続き、その両側から濠がはじまっています。

今回の調査の成果から想像してみると、水城の西門辺りは鴻臚館(福岡市)から続く官道が、一段と高い位置に建つ西門を目指してゆるやかに上がっていきます。門は何度か建て替えて、瓦葺の堂々とした楼門。土手の張り出しと大宰府内へ直線的には続かない官道の配置で、門の外からは大宰府側が見通せないようになっています。門の手前両側には水をたたえた濠があり、大宰府と外の世界を画すかのようです。

# 太宰府

1995  
8.1

■毎月2回/1・15日発行 ■編集/福岡県太宰府市総務部企画課 TEL(092)921-2121 内線513・514

## 太宰府の文化財

123

### 宝篋印塔板碑

(伝玄昉墓)


南北朝時代  
観世音寺境内



板碑の拓本

観世音寺境内の西北に建つ民家の庭先に、僧玄昉の胴塚と伝えられる宝篋印塔を彫り出した板碑があります。板碑というのは板状をした碑のことです。宝篋印塔とは内部に宝篋印陀羅尼経を納めたことに由来します。宝篋印陀羅尼経はそれを唱えれば、地獄の先祖は極楽に至り、百病、貧窮の者も救われるという功德の多い経だそうです。

10世紀の半ば、中国の呉越王銭弘俶は8万4000基の金銅製の小塔を造り、陀羅尼経を納めて諸国に配りました。日本にも数基現存していますが、そのうちの1基を九州歴史資料館で見ることができます。この小塔が宝篋印塔の原形ともいわれていますが、日本で石造塔として鎌倉時代以降造られるようになると、多くは墓や供養塔として造られ、陀羅尼経とは無関係になります。

さて、玄昉の墓ですが、自然石の片面を平らに削って、そこに半肉彫で宝篋印塔を浮き彫りしています。高さは約86センチで、塔身の部分に金剛界大日如来を表す梵字「」が刻まれています。

銘文がないので、この碑が造られた時期は、はっきりしませんが、近辺にある岩屋磨崖石塔群（平成7年3月1日号・4月1日号参照）などを参考にすると、南北朝時代の貞和年間（1345〜1349）より少し後の時代に造られたのではないかと考えられています。

# 太宰府

1995  
9.1

■毎月2回/1・15日発行 ■編集/福岡県太宰府市総務部企画課 TEL(092)921-2121 内線513・514

## 太宰府の文化財

124

### 皇朝錢

#### 奈良〜平安時代 宝満山出土



写真は宝満山中で採集された古錢です。これらは8世紀初めから9世紀半ばにかけて、国が発行した12種類の銅錢の一部です。一番古いのは和同開珎(写真①)で、708年、武蔵国秩父郡から銅が献上されたので、元号を和銅と改め、その年に銅錢を初めて铸造しました。

和同開珎から約50年たって、次の万年通宝(写真②)が発行されます。続いて神功開宝(写真③)が铸造され、その後は10〜20年間隔で平安時代の天徳2年(958)まで、9種類の銅錢が発行されました。これがいわゆる皇朝十二錢と呼ばれているものです。古い順に、和同開珎、万年通宝、神功開宝、隆平永宝(写真④)、富寿神宝(写真⑤)、承和昌宝(写真⑥)、

長年大宝、饒益神宝、貞観永宝、寛平大宝、延喜通宝、乾元大宝です。

宝満山では、長年大宝から寛平大宝の4種を除く8種の皇朝錢40数枚が見つかっています。

ではなぜ、宝満山でこのように多くの皇朝錢が見つかるのでしょうか。

皇朝十二錢は都の周辺では貨幣として流通していましたが、それ以外の地域では、その錢で物を買うという貨幣としての役目より、宝物あるいは中央との結び付きを象徴するもの、お守りなどとして所持されることが多かったと考えられています。それは皇朝錢が出土するのが、寺跡や墓、祭祀遺跡と呼ばれる神祭りをした場所などに多いからです。

宝満山も山中にいろいろなお祀りの跡が残っているように、古くから信仰の山でしたので、このような皇朝錢が見つかるのでしょう。

それにしても40数枚という数の多さと8種という種類の豊富さは特異です。これについては、奈良・平安時代に行われた遣唐使派遣に関係が深いのではないかと考えられています。それは遣唐使派遣が成功するように、国として、直接には中央政府の指示を受けた太宰府が祀りをしたと推測させられるからです。

# 太宰府

1995  
10.1

■毎月2回/1・15日発行 ■編集/福岡県太宰府市総務部企画課 TEL(092)921-2121 内線513・514

## 太宰府の文化財

125

### 相輪櫓

高さ5メートル 中心柱径40センチ

江戸時代 太宰府天満宮所在



五重塔などの仏塔の最上部の装飾部分に相輪といい、これを柱（櫓）の上に乗せ、柱の中に経巻を安置したものを相輪櫓といいます。平安時代に最澄が比叡山延暦寺に建てたのが最初といわれ、青銅で造られるのが普通です。太宰府天満宮にも江戸時代に建てられた相輪櫓が残っており、そこにはたくさん銘が刻まれ、次のようなことが分かります。

この相輪櫓は菅公900年忌に当たる享和2年（1802）に、博多濱口町濱の竹下禄助昌秀が発願主となり、多くの人たちの浄財を得て建

立されたものが、文政11年（1828）に大風で倒れ、弘化4年（1847）に再び、人々の協力により再建されました。

櫓を建造したのは博多鋳物師山鹿家で、享和の時は「山鹿五次平包茂・山鹿儀平包賢」が、そして弘化の再建時は子の「山鹿平十郎包秋・同喜兵衛包矩・同儀平包信」が鋳工として名を残しています。ちなみに山鹿包賢は、相輪櫓の3年後に、現在天満宮の楼門の前に横たわる神牛像を制作し、包秋と包信は同じく手水舎の奥に立つ麒麟並びにうそそを嘉永5年（1852）に鋳造しています。

相輪櫓はその後、元治元年（1864）に修理が施され、水手洗鉢や花瓶1対が奉納され、再び明治22年（1889）に修理と石垣が新築されています。そして明治35年（1902）に、それまで立っていた心字池三の橋の北東畔から、東神苑の牛臥山中腹に移転され、昭和53年に現在の回廊東側外の高台に再度移築されました。

このような変遷をもつ櫓ですが、享和2年の造立の時から博多の濱口町濱（明治7年に大濱町二丁目に改正）の人々が発起の中心になっており、それは弘化の再建時も、また元治元年、明治22年の修理などの時も同様で、子孫らしき人々の名前が刻まれているのが興味深いです。

仏教施設である相輪櫓は神仏習合時代の数少ない名残として貴重です。

# 太宰府

1995  
11.1

■毎月2回/1・15日発行 ■編集/福岡県太宰府市総務部企画課 TEL(092)921-2121 内線513・514

## 太宰府の文化財

(126)

### 孔子および二弟子像

三軀

銅製

高さ (孔子) 25・5センチ(中)

(顔回) 19・8センチ(左)

(閔子騫) 20・3センチ(右)

江戸時代 太宰府天満宮蔵

この三像は、太宰府天満宮御文庫にあったもので、奈良時代、吉備真備が唐から持ち帰って、学校院に置いていたものという言い伝えを持っています。

三像の真ん中は、論語で有名な孔子、向かって左側は顔回、孔子の10人の高弟の中でも一番上位で德行で聞こえた人です。右側は閔子騫で、やはり孔子の十哲の一人で孝で知られました。右の像は一説には曾子像ともいわれ、同じく孔子の弟子で孝行で称せられた人です。

三像とも銅製で、袖や襟の縁には唐草模様で銀で象嵌されており、顔や鬚など細かい部分は鑿で刻まれています。

これらは前述したように御文庫に置かれていましたが、「御文庫」というのは、延宝4年(1676)に宮師検校坊味酒

快鎮が、学問を志す人の手助けになればと、一人発起して作り始めた文庫のことです。建物は宝形造の建坪7坪2合という小さな土蔵で、社殿の西北に位置し、延宝8年(1680)に完成したようです。

中の蔵書類は、快鎮が自ら集めた物のほか、良き協力者であった福岡藩の儒学者具原益軒や、日本各地の人々から寄進された書物で、元文4年(1739)には、381部、3500冊もあつたそうです。中には黄門様で有名な水戸光圀が自ら編集した『扶桑拾葉集』36巻を寄進したのもあります。

これらの蔵書とともに、孔子三像は、古の大宰府学校の復活を夢見た「御文庫」にはなくてはならないものだったのでした。

# 太宰府

1995  
12.1

■毎月2回/1・15日発行 ■編集/福岡県太宰府市総務部企画課 TEL(092)921-2121 内線513・514



## 太宰府の文化財

(127)

### 恵比須神像

江戸時代 三条区所在

太宰府天満宮周辺の路地を歩くと、写真のような石像に所々出会います。釣竿を片手に、鯛を小脇に抱え、烏帽子を付けた姿は七福神の一人、恵比須神です。

恵比須神を祭る恵比須講は江戸時代に盛んになり、ことに商業者

の間で広まりました。正月十日の十日戎や、10月あるいは11月の20日ごろある誓文弘も恵比須講の一つです。

太宰府でも天満宮の門前町として商売する家が多かった六町——三条、連歌屋、馬場、大町、新町、五条——で盛んに行われ、写真のような神像も町内各所に建てられたのです。

お祭りは毎年12月3日で、前日に、組や最寄りの人たちの当番が御神体（石塔）を洗い浄め、その前に松飾りを立て、注連縄を張って、紅白の幕を張り準備します。

三日早朝に、鏡餅を一重ね、生鯛、お神酒、御饌米、野菜、果物、水を供え、燈明を上げます。朝6時ごろから、組の者が連れ立って他所の恵比須さんを拜んで廻り、それがすむと9時ごろには供物を下げて当番の家で直会をします。

ところで写真の神像は天保2年（1831）正月に建立されていますが、他に古いものでは、文化7年（1810）、文化14年（1817）という石像もあります。六町内では現在のところこれら江戸時代から大正時代にかけての19基の恵比須像が残されています。太宰府では他に数基の恵比須像がありますが、中でも商業地であった関屋には、文政9年（1826）の銘がある石像が残っています。

# 太宰府

1996  
1.1

■毎月2回/1・15日発行 ■編集/福岡県太宰府市総務部企画課 TEL(092)921-2121 内線513・514

## 太宰府の文化財

128

しろ いとおどしどう まる ぐ そく  
白糸威胴丸具足

外鉢高19・4センチ 胴高42・4センチ

桃山時代 太宰府天満宮蔵

写真の甲冑は織田信長の弟信行の長子信澄が所有していたと伝えられるものです。

冑は頭にかぶる部分(鉢)に64本の筋(六十四間筋)が施され、その

筋に水牛の角を立てた形(水牛脇立付六十四間筋冑)で、左右に耳のように付いている吹返しに織田家の

家紋の木瓜が付いています。

甲は白糸威胴丸。威とは「緒通し」で、甲を形作っている牛革製や鉄製の札を繋ぐ紐のことで、組糸や韋緒、布帛などを使いました。白糸威というのには一般には生地のままの絹の組糸を威に使ったものを指し、卯の花威とも呼ばれます。このように、甲冑の呼称を威の色や材質を付して表現するのは、いくさの時の晴着として陣中で存在をアピールするため、威の色に趣向をつくって作られたためです。

胴丸とは、騎射戦用の大鎧に対して、徒歩の下級武士たちが着用したものでしたが、室町時代ごろになる

と、軽快さや機能性で上級武将にも好まれ、高級品が作られるようになりました。

ついでに具足というのは、武家においては武具、特に甲冑を指しました。そして、甲冑に付属する顔や喉、手足などを防護する道具を小具足といひます。

さて、織田信澄は父信行が信長に殺されており、また夫人が明智光秀の娘であったことから、本能寺の変後、信長の三男信孝に殺されています。

その信澄の甲冑がなぜ天満宮に奉納されたか、その由来は分からないそうです。





## 太宰府

1996  
2.1

■毎月2回/1・15日発行 ■編集/福岡県太宰府市総務部企画課 TEL(092)921-2121 内線513・514



## 太宰府の文化財 ①29

太宰府天満宮繪馬堂 入り母屋造本瓦葺 江戸時代

太宰府天満宮の太鼓橋を渡って左側を見ると、屋根と柱だけの大きな建物が建っています。これは絵馬を飾る繪馬堂です。繪馬というのは、もともと神社に馬を奉納していたのを、馬の絵を描いたものを代わりに納めるようになって生まれたもので、後には馬の絵ばかりでなく、いろいろな絵が書かれて奉納されました。そして江戸時代ころになると、繪馬を揚げるための建物が造られるようになります。これが繪馬堂や繪馬殿と呼ばれる建物です。

太宰府天満宮のこの繪馬堂は江戸時代の文化10年(1813)12月に寄進されたと記録が残っています。

寄進の発願主は奥村源之丞号玉蘭でした。奥村玉蘭は博多中島町の醬油醸造元に生まれましたが、学問を好み、儒学者の亀井南冥、昭陽をはじめ、仙厓和尚、二川相近、そして頼山陽や上田秋成という京都や大坂の学者とも交遊を持ち、晩年には「筑前名所図会」10巻を編纂しています。

繪馬堂は玉蘭の呼び掛けによって、奥村一族や博多の商人たちが浄財を寄附しているようです。繪馬堂の柱の下の礎石に50数人の名が刻まれており、取次と思われる延寿王院、補佐檢校坊や、大工山孫大夫らの名も記されています。

繪馬堂に葺かれた瓦には「太宰府書画堂」の刻印があり、玉蘭は繪馬堂を書画堂とも称していたようです。また別に「考古傳後」の印もあり、これは瓦の作り方を天満宮創建期に似せていることなどと考へ合わせると、菅公の遺徳を慕い、大宰府時代を顕彰しようとする努力をしていた玉蘭の思いが表れているように感じます。

文化13年には玉蘭自身が繪馬を奉納しています。ところで繪馬堂は、もともと楼門の前に建てていましたが、昭和52年の楼門、回廊の拡張工事の際、現在の場所に移転されました。そしてこの度、傷んだ瓦を葺き直す工事が行われました。

# 太宰府

1996  
3.1

■毎月2回/1・15日発行 ■編集/福岡県太宰府市総務部企画課 TEL(092)921-2121 内線513・514

## 太宰府の文化財

130

### 渡唐天神像

紙本淡彩 縦122.7センチ 横48.4センチ

江戸時代 太宰府天満宮蔵

左図のような像をお寺などでご覧になったことはありませんか。  
渡唐天神あるいは渡宋天神と呼ばれる像です。頭巾をかぶり、中国風の道服を着て、両手を胸の前で重ね合わせ、袋を肩から下げて梅花一枝

を抱く姿が一つの定型になっています。これは次のような説話に基づいて描かれたものです。  
京都東福寺の開山聖一国師円弁が、宋の仏鑑禪師無準師範に禅を学び、帰国後、大宰府の横岳崇福寺

にいた時、菅原天神が現れて禅を問うた。国師は中国径山の仏鑑禪師に参禅するよう勧めたところ、菅神は一夜のうちに中国に飛んで無準に参じ、悟りを開いた証しの法衣を授けられて帰朝した。その後、聖一国師開山の博多承天寺に菅神が現れ、無準からの伝衣を鉄牛和尚に託し、伝衣の安置を願ったという。

この話は室町時代から流布します。その背景には、当時新興の宗派であった禅宗が、儒・仏一致や詩禅一致の思想を「和」の学芸的世界を象徴する菅神に結びつけて、自宗を広めようとしたことなどにあるのではないかと考えられています。殊に、話の舞台が大宰府や博多であることか

ら、この地域の禅宗寺院、中でも東福寺派の禅僧たちによって、渡唐天神思想は流布されていったのではないかと考えられています。  
さて左図は、狩野元信が描いた渡唐天神像を手本にした元信様の図柄ですが、腰の袋が一枚の布になるなど形式化が見られ、江戸時代も終わりごろの作品だろうと考えられます。

中世から近世を通じ人々の中に生き続けた渡唐天神像は、日本の宗教的・文芸的風土が生んだ独特の絵画的世界であり、菅神が学問文道の神として信仰されていく上で大きな影響を与えたと思われれます。

